

氏名	尾崎 奈津
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成16年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	現代日本語の否定とモダリティ
学位論文審査委員	主査・教授 辻 星児 教授 和田 道夫 教授 江口 泰生 助教授 宮崎 和人 大阪大学大学院文学研究科教授 工藤真由美

学位論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の否定文について、様々なセンテンスタイプを通じて、それが肯定文には見られない独自のモーダルな性質を帯びていることを、対話的テキストに現れる膨大な量の用例に基づいて実証的に論じたものである。A4判ワープロ打ち（40字×36行）で、183頁に及ぶ。ほとんどの章が在籍中の公刊論文（印刷中を含む）や研究発表に基づいており、それらに大幅に手が加えられ、内容的に改善している。

I 序論

第1章 否定の研究史、第2章 本論文の枠組み

従来の否定に関する研究を概観し、検討すべき問題を明らかにした。

II 「叙述」と否定

第3章 否定のテンス・アスペクト形式の用法について

叙述の分野の問題として、はじめにテンス・アスペクトの問題を取り上げた。まず第3章では、肯定と否定の各テンス・アスペクト形式の用法を比較し、両者の間にどのような違いがあるか、また否定のテンス・アスペクト形式にはどのような問題があるかを確認した。

第4章 「シナイ」のいわゆる現在用法について

肯定の「スル」と異なり、否定の「シナイ」はいわゆる現在を表す場合がある。4章ではこの問題について考察し、「シナイ」のこの用法は“話し手の観察・確認の積み重ね”に支えられて成り立っていること、従来この「シナイ」は〈完成相現在〉の否定とされているが、意味特性からみると〈パーフェクト相現在〉であること、さらに肯定では「シテイル」と「シタ」が〈パーフェクト相現在〉を表すのに対して、否定では「シテイナイ」と「シナイ」が〈パーフェクト相現在〉を表すというずれが生じていることを述べた。

第5章 「シテイナイ」「シナイ」の過去用法について

肯定の「シテイル」と異なり、否定の「シテイナイ」は、「経験」「記録」などの意味合いを伴うことなく、単なる過去の特定時点のことを表す表現として用いられることが多い。5章ではこの現象について考察し、「シテイナイ」には“過去に当該の事態があった”という相手の想定・認識を誤りとして〈否認〉するという談話的な機能があること、そしてこの〈否認〉の機能は、“肯定的想定を前提とする”という否定の特性と、「シテイナイ」の〈パーフェクト相現在〉の意味が合わさって生じた現象であることを述べた。また「シナイ」も「シテイナイ」と同様、過去の特定時点のことを表すのに使われるが、これも〈否認〉の機能にかかわる現象であること、ただし「シナイ」の〈否認〉の機能は、「シテイナイ」の場合のように、形式の持つ用法から生じたものではなく、文脈上生じたものであることを述べた。

第6章 「セズニイル」「セズニイラレナイ」について

否定には存在表現を含む複合形式として、「シテイナイ」と「セズニイル」という二つの形式がある。第6章では後者の「セズニイル」について考察し、「セズニイル」は「ある」（「居る」）ことを表す形式であり、「シナイ」「シテイナイ」というアスペクト形式とは異なること、また意味の面では、主体のあり方を表す形式であるが、同時にそこには意志や当為判断といったモーダルな要素が強くからんでいること、そして「シテイナイ」と「セズニイル」は、一方はテンス・アスペクト形式、一方はモーダルな要素を強く表す形式というように分化していることを述べた。また、「セズニイラレナイ」についても考察し、「セズニイル」から「セズニイラレナイ」への移行では、単に不可能という意味が加わるだけでなく、主体の心情や状況からみでの不可能という意味が加わることを述べた。

第7章 否定の丁寧形「ナイデス」と「マセン」について

肯定の丁寧体と異なり、否定の丁寧体では述語のタイプを問わず、「マセン」「ナイデス」という二つの丁寧形が併用されている。第7章では、二形式のうち遅れて成立した形式である「ナイデス」について考察し、「ナイデス」は i. 終助詞が付いた場合、ii. 意志・命令よりも叙述の場合、iii. 問いかけに答える場合や、先に提示された考え・想定を否認あるいは是認する場合など、事実＝[～スル]か、事実＝[～シナイ]かについて検証・判断するというプロセスを経た上での確信や主張を表す場合に使われやすいことを述べた。

Ⅲ 「実行」と否定

第8章 否定の意志表現について

意志に関する考察では、はじめに「スマイ」を中心に考察し、「スマイ」は当為判断などを含む傾向が強いこと、そしてこの点で肯定の「ショウ」や否定の周辺形式である「シナイ」「シナイツモリダ」「スルツモリハナイ」と異なっていることを述べた。また「ツモリ」を含む三形式の異同についても考察し、「シナイツモリダ」「スルツモリハナイ」「スルツモリデハナイ」は、意志を表す表現と意図を表す表現に分けられること、「スルツモリハナイ」などの使用には〈否認〉の機能が大きくかかわっており、そこから文脈的な制約などが生じていることなどを述べた。

第9章 否定の命令表現について

命令に関する考察では、まず「スルナ」の文を対象に否定命令の機能を分類した。その上で肯定命令との比較を行い、命令の機能のヴァリエーションについては、従来いわれているような肯定と否定の間での違いは見られないこと、ただし、否定命令は評価・判断を含みやすいなどの点で肯定命令と異なることを述べた。さらに、周辺形式の「スルノデハナイ」「シテハイケナイ」「シナイコト」「シナイ」についても検討し、特に「シナイコト」と「シナイ」は命令表現として使用される範囲が非常に制限されていることを述べた。

以上、全体の考察を通して、従来、否定は肯定の裏返しとしてとらえられがちであるが、意味・用法などの点で両者は必ずしも整然と対応していないこと、特に、肯否の違いは実行系よりも叙述の方でより顕著に現れること、また肯定から否定への変化は単に肯否極性が変わるだけの变化ではなく、観察・確認、意志、当為、否認などさまざまなモーダルな要素を巻き込む傾向の強い変化であることが明らかになった。なお、これらのモーダルな要素は、結局は“否定は肯定的想定の上に成り立つ”という否定の特性から生じたものである。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2004年2月20日、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、現代日本語の否定文について、様々なセンテンスタイプを通じて、それが肯定文には見られない独自のモーダルな性質を帯びていることを、対話的テキストに現れる膨大な量の用例に基づいて実証的に論じたものである。本論文の主な特徴としては、〈叙述〉、〈実行〉といった文のモーダルな意味の分類に沿って記述していること、常に肯定文との関係を意識していること、単文レベルの記述に止まらず、文脈レベルで分析していることが指摘できる。また、基本的に多数の実例の観察から事実を見出すという方法を取り、作例による恣意的な解釈を極力避けている点、用例の分布や偏りなどにも配慮しながら考察を進めている点、文章がよく練られており、構成がしっかりしている点なども、長所として挙げることができる。誤植も非常に少なかった。

本論文では、まず序論で、先行研究を幅広く概観したうえで、この論文の研究課題を設定する。取り上げる文献は、伝統的な国語学から日本語学、さらには一般言語学の外国文献にまで及ぶ。否定の研究史として、非常に充実したものになっている。続く第Ⅱ部では、叙述系の否定文について記述しており、前半は、否定のアスペクト・テンス体系を肯定のそれと比較する形で記述し、「シナイ」「シテイナイ」に〈パーフェクト相現在〉用法があり、この用法の「シナイ」には、〈話し手の観察・確認〉といった一種の〈証拠性〉の意味が、また、この用法の「シテイナイ」には、〈聞き手の想定・認識に対する否認〉という一種のテキスト的機能がやきついていているという、きわめて興味深い事実を指摘している。また、第Ⅱ部には、このほか、「セズニイル」「セズニイラレナイ」、否定の丁寧形式に関する考察があり、いずれも、先行研究をよりいっそう進展させている。第Ⅲ部では、実行系の否定文を、意志と命令に分けて記述し、意志の否定文については、〈当為判断〉の含意や〈意志〉と〈意図〉の区別、〈否認機能〉など、従来にない重要な観察が施され、命令の否定文については、肯定命令との対照に重点をおき、否定命令の〈評価性〉という重要な事実の指摘に到達している。

本論文の審査には、日本語学、国語学のほか、言語学、生成文法を専門とする委員があたり、様々な視点からの評価・指摘がなされた。各委員からは、問題点や要望として、「ハ」との関係も考察すべきではなかったか」「スルノデハナイ」「シナイデクダサイ」や願望の形式も扱うべきではなかったか」「実行系における肯否の異なりをもっと追究すべきではなかったか」「文法操作と evidentiality との関係を追うとよいのではないか」「用法と意味・機能の境界がやや曖昧ではないか」「国語学的な研究史としては、山田孝雄の流れを取り上げるべきではなかったか」「さらに否定疑問文を対象にすれば、モーダルな意味との関係をほぼ押さえたことになる」などの意見も出されたが、これらは本論文の基本的な価値を損ねるものではなく、いずれの委員も、論文全体に対しては、博士論文として大変見所の多い優れた研究であるという意見を表明した。特に、招聘委員からは、否定文の機能を語用論的前提との関連で分析することの妥当性が実行系の否定文でも確認できたことにきわめて大きな意義を認めるとの評価や、本論文が今後さらに発展する可能性を具体的に示唆する意見が提示された。

審査委員会は、以上のような審査を経て、本論文を博士の学位論文として認定することについて、全員一致で合意した。